

（６）創業

■「三菱が断念したヤマを掘る」 “不運”の快男児、古賀春一

五島灘に浮かぶ長崎・松島。１９０５（明治３８）年、古賀春一（１８８２～１９５１）＝三井松島産業初代代表取締役＝が、この島に立っていた。弱冠２２歳だった。

「あの三菱が採炭を断念した難しい島だ。しかし、よい石炭が出る。古賀家を立て直すために、必ず事業を成功させる」

松島は西彼杵（そのぎ）半島の沖１キロにある。遠見岳を抱く周囲１６キロの島は江戸時代、捕鯨基地として栄えた。住民は小規模に石炭を掘り、生活に利用した。

明治に入り、石炭は近代日本の原動力となった。蒸気機関の燃料に加え、製鉄に欠かせないからだ。各地でヤマの開発が盛んになった。

福岡・筑豊では、貝島太助（１８４５～１９１６）、麻生太吉（１８５７～１９３３）、安川敬一郎（１８４９～１９３４）らが「炭鉱王」として名を上げた。

各社がヤマの獲得競争を繰り広げる中、三菱が１８８５年、松島の地質調査に乗り出した。三菱は土佐藩出身の岩崎弥（彌）太郎（１８３５～１８８５）の下で、巨大財閥として急速に発展していた。

三菱は翌８６年、採炭に着手した。しかし、深さ７４メートルに達したとき、多量の海水が湧出した。掘り進めることができず、わずか３年で撤退した。

その鉱区を佐賀の実業家、古賀善兵衛が買った。

呉服商だった古賀家は維新後、銀行業を始めた。善兵衛は古賀銀行を、九州五大銀行の一つにまで成長させた。北方村（現佐賀県武雄市）で経営した炭鉱の利益も、銀行の成長に大きく寄与した。

春一は、その善兵衛の養子だった。

× × ×

春一は、佐賀県中原村（現みやき町）に生まれた。幼いころから成績優秀で、教師らは将来を囑望した。

しかし、中学のとき実家がつぶれ、進学は閉ざされた。

「春一の才能を、そのままにしておくのはもったいない」。校長から春一のことを聞いた善兵衛は、春一を子弟の家庭教師として招いた。

春一は、気立てがよく誰からも好かれた。善兵衛は春一を養子とし、東京高等商業学校（現一橋大）に進学させた。春一は善兵衛の恩を胸に刻んだ。

春一が東京生活を送っているころ、善兵衛は松島の採炭に着手した。北方炭鉱の採炭が終わりに近づいたこともあり、古賀家の存亡を、新天地に賭けた。

善兵衛はその責任者として春一を指名した。東京から呼び戻され、1905年、古賀鉱業社の社長として松島に乗り込んだ。

春一は、三菱が採掘を断念した場所に狙いを定めた。多量の出水にどう対処するかが問題だった。

「天下の三菱でさえ採炭を断念したのに、佐賀の一銀行家の古賀に、松島の開発ができるのか」

島民はささやき合った。

春一は、北方炭鉱の資材と人材を松島に投入し、第1坑を掘った。しかし、経営を軌道に乗せるには、一層の採掘が必要だった。

「出水の多い炭鉱で、採炭量を上げるには、優秀な技術者の力が必要だ」

春一は一人の技師に着目した。筑豊の炭鉱王、安川敬一郎の秘蔵技師、頼尊淵之助（らいそん・ふちのすけ）だった。春一は、三顧の礼で、頼尊を招いた。

春一は、頼尊の住まいとして、景色のよい場所を用意した。一方自身は、破れた服を着て、坑道入り口近くの小屋に住んだ。

頼尊は凄腕の技術者だった。作業員と日夜苦闘し、第2坑、第3坑と次々に掘り、採炭を始めた。

出炭量の増加に加え、見込み通り質もよかった。光輝く「黒いダイヤモンド」の松島炭は、日本最良炭の一つに挙げられた。

× × ×

この松島と春一に、三井財閥が目を向けた。

三井は当時、三菱と全国で炭鉱買収競争を繰り広げていた。三菱が1881年、長崎の高島炭坑を買収すれば、三井は88年に福岡、熊本にまたがる三池を獲得した。

その三井は、長崎に足がかりが欲しかった。理由は2つあった。

一つの理由は、長崎の国際性だった。長崎は国内有数の貿易港であり、三池の石炭を上海、香港などへ輸出するのに適していた。

もう一つの理由は、長崎が三菱ゆかりの土地だったからだ。三菱創業者の弥太郎は幕末から長崎で商売した。弥太郎死後に三菱は、官有長崎造船所の払い下げを受けた。

三井は江戸時代前期からの歴史をもつ。これに対し三菱は、維新後の“成り上がり”だ。そのライバル三菱の牙城・長崎に、くさびを打ち込みたかった。

「三菱高島に対抗できる炭鉱が必要だ」

三井は古賀に近づいた。仲介に佐賀出身で首相を務めた大隈重信（1838～1922）の存在が見え隠れする。大隈は古賀家と信親交が厚く、また、旧三井物産設立に一役果たした。

「三井の資本を得れば、さらに炭鉱開発を推進できる。それが日本の発展にもつながる」。春一はこう考えたに違いない。

1913（大正2）年1月25日、三井と古賀は、松島炭鉱社（現三井松島産業）を設立した。出資比率は古賀側が40%、三井側が60%とした。

同日の設立総会で、春一と頼尊が松島炭鉱の代表取締役役に就任した。

松島の石炭は、旧三井物産を通じて全国各地に販売されるようになった。海外輸出も行った。香港やシンガポール、上海へ積み出された。

翌14年に第一次世界大戦が勃発し、石炭市況は活況を呈した。会社は第4坑の開坑に着手した。セメントを使って地盤を強化するという米国の工法を、日本で初めて導入した。

× × ×

三井の後ろ盾を得た春一は、全国の炭鉱に手を伸ばした。

松島炭鉱設立の前後から、磯原（茨城県）や常磐（福島県）、本山（山口県）など各炭鉱のヤマに進出した。三井の出資も仰ぎ、大日本炭鉱を設立し、社長としてこうしたヤマの陣頭指揮を取った。

九州では、長崎の電力会社「長崎電灯」の経営権を取得した。さらに福岡の九州電灯鉄道にも出資した。後の九州電力、西日本鉄道などの源流となる会社だ。

この出資を通じて、福沢諭吉の養子で「日本の電力王」と称された福沢桃介（ももすけ）（1868～1938）や、長崎・壱岐出身の松永安左エ門（1875～1971）の知遇を得た。

第2次大隈内閣（1914～1916年）の時には、全国を代表する経営者300人の中に選ばれた。中高年の経営者に交じた春一は「瀟洒颯爽（しょうしゃさつそう）たる一青年」と有名になった。「気鋭の礦（鉱）業家」と呼ばれることもあった。

だが、絶頂期は長くは続かなかった。

関東大震災（1923年）、金融恐慌（27年）、世界恐慌（29年）と著しい不況が続いた。石炭市況は暴落し、経営する松島炭鉱や大日本炭鉱は、業績不振に陥った。

事故が追い打ちをかける。

29年、松島炭鉱の第3坑から突然出水し、一瞬にして42人の命が奪われた。34年、第4坑でも水害が発生し、54人が亡くなった。35年2月28日、会社は松島での採炭を断念した。新天地を松島の北10キロにある大島に求めた。

春一の事業に資金を投じていた古賀銀行も窮地に陥る。26年に一時休業に追い込まれ、33年、ついに解散が決まった。

預金保護制度などない時代。銀行破綻は庶民の生活を直撃する。佐賀では古賀家に対する怨嗟（えんさ）の声があふいた。

経営不振をみて、三井財閥は大日本炭鉱からの出資を引き揚げた。

それでも、春一は経営者としての責任を全うしようとした。大日本炭鉱の債務整理に奔走した。一段落した1940（昭和15）年、同社社長を辞任した。

第一線を退いた春一だが、業界団体はその手腕を買っていた。国家総動員法に基づき、戦時下の生産増強に向けた「石炭統制会・組合」が全国で設立された。春一は東京と仙台地方の組合理事長に推された。

春一は戦後の1951年、70歳でこの世を去る。

「九州男児の真髓」「奮闘の化身」「快男児」と呼ばれた男も、後半生は不運が続いた。

春一は生前、こう語っていた。

「もともと佐賀人は頑固で実業家には適さないといわれるが、それは間違っている。武士道を重んじるからか、先輩の多くは政治家や軍人官吏で、実業家の育成に力を入れていないだけだ。だから佐賀に、渋沢（栄一）や大倉（喜八郎）らがないのだろう」

春一は、自ら渋沢や大倉を目指し、さらに後進の実業家が佐賀から育つことを願っていた。

だが、銀行破綻の余波が続く郷里では、高く評価されることはなかった。春一の功績をたたえる石碑は、常磐炭鉱のあった福島県いわき市内にある。（敬称略）



【参考文献・協力団体】

『在京佐賀の代表的人物』（喜文堂）

『佐賀史談』（佐賀史談会）

『九州之巨人』（博進社）

『三井の石炭』（三井物産株式会社石炭部）

『いわき市勿来地区地域史3・下巻』（いわき市勿来地区地域史編さん委員会）

「みなくるSAGA」

西海市観光協会理事、松田一明さん

出典：産経新聞 2016.8.24